防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業成果報告書

学校名：岩手県立沼宮内高等学校

Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

岩手町は過去に大きな災害が少なかったことから、本校生徒の防災への意識が高いとは言いがたい状況にある。そのため本事業では、本校生徒の地域防災及び復興への更なる意識向上を図り、自然災害の危険に際して自らの命を守り、安心な社会づくりに貢献する人物の育成を目的とする。

Ⅱ　取組の概要

１　復興教育の意義を学ぶ

（１）　復興学習オリエンテーション（５月２３日）

１学年を対象に担当者より東日本大震災や熊本地震の映像を見て、防災を学習する意義について説明した。

（２）　講演会（５月３０日）

岩手日報編集局報道部鹿糠敏和記者から東日本大震災当時の様子と、岩手日報社のデジタルアーカイブ「犠牲者の行動記録」をもとに講演をいただいた。

２　被災地から学ぶ

（１）　１学年被災地訪問（宮古市田老）（８月２３日）

午前：「学ぶ防災」による防潮堤やたろう観光ホテルでの津波映像の説明

午後：NPO 法人立ち上がるぞ！宮古市田老のご協力により、元消防士の方による講話や避難路体験、田老一中資料室「ボイジャー」見学。帰路、車窓よりグリーンピア三陸みやこ内の仮設住宅及び仮設商店街を見学した。

訪問して学んだことを、レポートとプレゼンテーションにまとめ、文化祭で発表した。また、NPO 法人からの依頼で、美術選択生が田老のイラストを作成した。

（２）　２学年被災地訪問（宮古市田老）（１０月２８日）

台風１０号による国道の交通規制の影響から、現地での時間を１年生と同様に取ることができず、「学ぶ防災」２時間コースにより、津波映像の鑑賞や避難路体験などを行った。また、車窓から岩泉町内の台風１０号被害を見学した。

３　防災ゲームを活用した学び

（１）　クロスロードゲーム（災害対応カードゲーム）の実施（９月２８日）

クロスロードゲームをとおして、実際の災害を想定し、どのような対応をとるか、それにはどのようなメリットとデメリットがあるかを考えた。グループでのディスカッションを通じて意見を深めることができた。

（２）　ＨＵＧ（避難所運営ゲーム）の実施（１１月９日）

本校は岩手町の指定緊急避難所及び指定避難所となっており、発災時には生徒も避難所運営に関わることが想定されるため、岩手大学客員教授の越野修三先生にご指導いただき、ＨＵＧを実施した。非常に忙しく頭を使うゲームであり、グループ内での意思疎通が大事であることにゲームが終わる時には気がつくことができた。実際の震災時の避難所運営の困難さを想定し、普段からのコミュニケーションや備えの大切さに気がつくことができた。

４　地域を知り、防災を「自分事」にする学び

（１）　復興道路見学（１学年）（１０月２８日）

企業見学の一環として、盛岡市川目の復興道路を見学し、震災時の道路の役割や、復興道路の意義などを学んだ。

（２）　ＤＩＧ（災害図上訓練）及び防災町歩きの実施（１２月８日）

自分たちが暮らす町の防災上の強みと弱みを知り、それをこれからの町作りに生かしていくために、越野修三先生にご指導いただいた。午前中はＤＩＧをとおして地図に色分けやシールを貼ることで沼宮内地区の防災上の特徴を把握した。

午後は実際に岩手町沼宮内地区を４つのグループに分かれて歩き、午前中に地図上で確認した防災上の強みや弱みを実際に確認したほか、地図上ではわからなかったことも考えながら町歩きを行った。最後にグループごとに町歩きで気づいたことを発表した。

５　各教科における学び

（１）　家庭総合（９～１０月）

平時は座布団として使用し、いざというときには防災頭巾になるものを作成した。文化祭で展示し、その後は生徒が教室で使用している。

（２）　保健体育（２月２２日）

盛岡中央消防署岩手分署の協力の下、普通救命講習を１学年全生徒を対象に行った。

６　１年のまとめ

（１）　アルファ米の試食と、これからの防災について（１月１８日）

１月１７日の「防災とボランティアの日」を機に、阪神淡路大震災や糸魚川大火から沼宮内の防災について再考する契機とした。またアルファ米を試食することで、災害時の生活のあり方を再度考え、備蓄についても考える機会となった。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

この事業を通じて本校において、一年間の見通しを持って復興教育を実施することが可能となった。東日本大震災から学び、実際に自分たちの地域での防災を考えることにより、防災を自分事としてとらえることができた。また、様々な手法により、生徒が考える活動を多く取り入れることで、生徒が自ら問題意識を持ち課題解決に向けて取り組む、主体的で対話的な学びになった。

生徒たちの感想によると、オリエンテーションの段階では防災への決意も漠然としたものだったが、最後の学習のまとめでは、身の回りの危険を知り、訓練や備蓄など日頃の備えの大切さに気付き、さらには東日本大震災の風化にも思いを馳せるなど、具体的に考えることができるようになっている。さらに、復興にかかる年数や海外での防災訓練の事例、災害の種類などへの興味を抱くようになったことは本事業の成果といえるだろう。（別添「オリエンテーション感想（防災・復興学習について）」「防災学習のまとめ」参照）

また、岩手日報社の鹿糠記者の講演、学ぶ防災のガイドやＮＰＯ法人立ち上がるぞ！宮古市田老のみなさん、岩手大学客員教授の越野先生からのご指導など、外部からの支援も学びを深めることにつながった。校内での活動に留まらず、多くの方のご協力をいただいたことで、成果を上げることができた。

２　課題

（１）　教育課程への位置付け

防災学習と進路学習を含む他の学習とのバランスについてが学校全体の課題として挙げられた。防災学習を含む「いわての復興教育」は地域の特性を考え、課題発見力や課題解決能力の育成するのに最適な教材であるため総合的な学習の時間の活用も含めて、校内での検討が必要である。

（２）　避難訓練との連動

自分の命を自分で守るために、自分で考えて行動できる訓練にしていく必要がある。

（３）　地域との連携

自分たちが考えた地域防災を実際に提案したり共に活動する、より自分たちの地域理解へつなげるためにも地域との連携が求められる。

（４）　臨機応変な対応

今年度の台風１０号のように、災害はいつどこで起こるか分からない。身近な地域で災害が起こった場合のボランティア活動など、臨機応変に対応していきたい。